

日刊 發行部編輯人 川崎文治 本社下町同地(電話三三〇番) 印刷部 電話三三〇番



刊夕日三月三

定部金貳錢 一ヶ月廿錢 三ヶ月五十二錢 半年九十錢 一年一圓七錢 郵費在內 印刷部 電話三三〇番

第五十四議會の解散は反對
常盤論壇
民政派自重せよ
政界通人
第五十四議會の解散は反對
黨が多數を擁して事毎に反
對の態度に出づる爲政務の
遂行が困難であるといふこ
とが主な理由で國民の信
任を問ふたものである而し
て其結果は與黨は解散當時
百八十九名であつたものが
二百二十一名に増加して第
一黨となり民政黨は豫想以
上の成績を挙げたるもなほ
二百二十一名より二十餘
に減じて第二黨に陥落した
のであつて此事實は國民の
信任が何れに重きをなした

かといふことを極めて明瞭
にしたものである然るに民
政黨では與黨が衆議院の過
半数たる二百三十三名以上
に達しなかつたといふ事を
以て政局安定せずとの口實
を設けて倒閣運動を企てる
るやうであるけれども之れ
は物にならぬと思ふ即ち總
選挙の結果民政兩黨の候補
者が大部分當選し中立其の
他の當選者は極めて少数と
なつて宛然三大政黨對立の
形勢を實現するに至り而し
て政界兩黨は國民の公正な
る裁判の下に明確に其の地
位を轉倒したのであるにも
拘らず第二黨たる民政黨が
自黨の勝利を唱ふるさへ民

活版印刷の御用命を御願致します
鮮美 印刷部
所刷印日每盤常
五三町橋長町平
(番〇三六話電)

貸家案内
白銀町 八〇〇〇 勤人向
同 二六〇〇 勤人向
同 一四〇〇 勤人向
同 一〇〇〇 勤人向
仲間町 五〇〇〇 勤人向
同 四〇〇〇 勤人向
同 三〇〇〇 勤人向
同 二〇〇〇 勤人向
同 一〇〇〇 勤人向
柳町 八〇〇〇 勤人向
同 七〇〇〇 勤人向
同 六〇〇〇 勤人向
同 五〇〇〇 勤人向
同 四〇〇〇 勤人向
同 三〇〇〇 勤人向
同 二〇〇〇 勤人向
同 一〇〇〇 勤人向
同 八〇〇〇 勤人向
同 七〇〇〇 勤人向
同 六〇〇〇 勤人向
同 五〇〇〇 勤人向
同 四〇〇〇 勤人向
同 三〇〇〇 勤人向
同 二〇〇〇 勤人向
同 一〇〇〇 勤人向
加藤營業所 白銀(電話三三〇番)
學生カバン 卸し賣り
最特品五拾錢ヨリ 一個でも卸賣致します
玩具、文具、書籍、糸類
問屋 森下商店 小町二丁目 小町一丁目
まめや號

能率増進現代的日用品
ワシ印ハラゴム印肉バット(金拾五錢)
コレハ小サキ刺或ハミト印用ニ携帶便利
ライオン印萬年バット(金壹圓也)
コレハ店判、仕切特、官廳、會社、銀行用
(インキ)を塗らずに永久に使へるゴム印肉
僅か拾五錢で
拾萬個印が押せます
コノハラ萬年バットは一個が五年間以上使用出来る事
は逓信省經理局の認定書に依り明かです
平町古鍛冶町十番地(電話四四番)
萬年バット 阿康藥店
東北代理店

美術袋物カバン類の御用は
ヨドヤ「堅い品」を求めなれ
當店は「飽く迄も「親切第一」を信条とします
「小さくとも「堅い店」を標語とします
平町三丁目平銀行横
美術袋物カバン類 洋品雜貨
三ツモトヤ
小役員入用

冷たい時の熱いお飲みもの
美味しい香りの良い森永コ、アを召せ
森永ミルクコ、ア 六〇分罐入 五十錢
同 コ、アマミルク 同 三十錢
マツモトヤ
平町四丁目
電話二一四番

印半天専門 優秀品の証明
草野染工場
電話三四八番
磐城 平町
◎徒弟入用 徒弟契約ニ付テハ年明キニ
際シ有利ニ御相談申上候

新築移轉
耳鼻咽喉科専門
場所(舊診療所裏通り)
合津醫院
平町仲田町(電話五五九)

診察無料
如何なる重患でも直ち癒る三丁目の大
谷へ御出下さい
院長 博士 敬白
大谷時計病院
電話一九番

動脈硬化症、腦溢血特效劑
青森山 中國靈藥
定價一週分九〇 二週分一七〇 三週分二五〇
男女中風症 半身不隨 言語難澁 氣血不順等
他藥にて癒ざる人々是非御試用を勧む
代理店 山野邊藥局

セメント 壁用材料
コールタール ペンキ塗料
板ガラス
磐城セメント株式會社
代理店 西村屋藥舖
平町二丁目(電三)

編輯記者募集

- 一、資格 専門學校卒業以上の學力を有し多少經驗ある者
 - 一、人員 一名(申込多數の場合は試験採用す)
 - 一、俸給 初給七十圓
- 此外見習記者として中等學校卒業程度以上の學力を有する者一名採用す
- 右志願者は三月廿一日迄に履歷書持参出頭されたい

常磐毎日新聞社

農試祝賀に

平町が協賛

谷口で招待宴

石城郡神谷村農試試験分場五周年祝賀式は今年十一月盛大に舉行合せて各種品評會展覽會等が開かれるが平町から一千圓の寄付を得たいと交渉があつたので伏見町長は二十九日の町會に諮つたが五六百圓を支出し分場における園遊會終了後谷口樓に重なる關係者百餘名を招待する程度の協賛に止める意向であつた

二派に分れて

猛運動開始

平町永年の懸案であつた第三小學校建築問題も町會に於て明年度から十四萬三千圓を投じて着工することになり青沼町議外十名が委員にあげられ調査をする事に

鳳凰に櫻を配す

平美人の春仕度

花に情趣を添ふべく

京都へ注文

平町新田町の花柳界では先年來花時に於ける藝妓の服装を一定し年輩によつて區別した紅紫の晴れ着は松ヶ岡公園の花下に着る平明を飾つて少からず濃艶なる情趣を添へ花時に於ける呼び物の一つとなつてゐるが右は兩三年前の調査に係構想圖案等昨今漸く一般の好奇から遠ざからんとしつつあるのを今回更に之を新調する事となり目下京都に注文であるが今回の意匠は年輩等によつて色分けせず鳳凰に櫻花を配した見るも絢爛たるものである

東部居住民は第三校新築設置期成同盟會を組織して運動を開始し一方鐵道以北の

東部居住民も亦新校設置を希望し策動を開始した東部に決定することは勿論である

平町に春の訪れ

草花店頭へ笑ふ

梅も既にぼつくと

三月といふ聲と共に急に何とはなくかう湯の嶽おろしやうな氣がするが事實昨今の陽氣はこの調子があつて十日も續くなら櫻花もほころび初めるのでは無いかと思はれるほどの暖かさで梅はもう南枝からぼつと花をつけこの十日頃はいよいよ見頃と思はれる温室咲の兩雑種の鉢ものもぼつと市場へ出初めたが価格は鉢つき

アネモネ 三五六〇錢
サイネリア 三五六〇
チユウリップ 四〇五五
ムスカリ 二五三五
水仙 二五四〇

といふところ冬冬の長い間生花の誘惑に苦じめられてゐる各家庭から大變な需要があつていづれも飛ぶやうな賣行きを見せてゐる



家庭欄

御婦人の靴

最近婦人靴の流行に於て著しい傾向は、一般に踵が低くなりつつあることで、こ

實現近し

平藪市場の加入續々申込

石城郡販賣利用組合の平及植田藪市場新設計は既報の通りで大体養蠶これとしても歓迎し且各町村の密附額等も順調に應諾され一般組合加入者の募集成績も各町村に數名の委員を置き勸誘中で頗る良好なるものがあ

る但し過般の選舉騒ぎで稍々中斷された形ちとなつた爲組合の方針通り果して春藪季迄に設立され得るや否や疑問であるが大勢は既に前述の通り赤井小川の如き兩村だけでも三百餘名の組合加入者を見てゐる様な有様であるから其實現も案外急速に運ばれるであらう

平藪の貯金

水戸管内第一

平藪従業員中機關庫保線區を除く従業員百七十八名の鐵道省預金總額は同機關庫係松本金次郎氏の二千八百圓を最高に八萬七千八百八圓十五錢の多數に上り鐵道省水戸事務所管内中第一位にあり豊崎驛長其他の主任等益々部下に對し貯蓄思想の普及に努めつつある

鬼の耳

瘦せ度い一心で猫いらすに娘命取らる東京下野方町新井宿五三〇山越重太郎長女きみ(七)も肥満してゐるのを氣にしてゐたが猫入らずを飲むやせるといふ事を聞いて一日夕誤つて多量に嘔み苦悶を始めて死亡した

平軍人記念式

平町在郷軍人分會では来る十日陸軍記念日に際し例年の如く平町松ヶ岡公園に於て記念式を舉行し終つて尼子亭に懇親會を開催するが當日は茂澤中尉の實戰談がある

これは衛生上から観ても最も良いことであり、踵の細く高いものは始終足許に氣をくばる關係上、神經衰弱その他の病症におかされ勝ちであります。

低い踵を持つた子供靴のやうな平な底をした靴をサンダルといひます、このサンダルは既に巴里では非常に

新入學の父兄

(終)

今でこそ市内小學校の児童が着た服が丁度多いが一年大正のころある小學校で洋服問題が起つた時、新聞紙上を賑し父兄達も二重の負擔になるから洋服などは奨励して戴いては困ると某校長に嚴重にかけ合つたものだそんなこんなでこの問題がバツと世の中に知れ亘つた時ある商人が夏の小倉服を持ち込んだが一着僅かに一圓二十錢位まで單衣一枚買ふても安いとあつて今までの洋服反對の父兄達も二

着位づつ先を争つて買つたといふ喜劇も残つてゐる

某校長も「洋服を着たつて靴を履く必要はない、下駄の澤山とフロックに足駄履きの先例を作つた、もう一度繰りかへしていふ、坊ちゃんお嬢さん方の着物は汚れてゐなかりや充分に樂に運動が出来て汚して惜しくないものを選ぶこと

最後にもう一つそれは學校の先生殊に受持の先生は坊ちゃん嬢ちゃん達の尊敬の的の中心であるから家庭では何所までもその氣持を助成して行く事が大切だ

専門の智識を有つて世の

中に働いてゐる智識階級の中に「先生がそんなことを言つたつて先生やお父さんの方が偉いんだとお父さんは大學を出たんだとお前の先生の教へた事は間違ひでお父さんのいふことが本當なんだ」などと言ひ兼ねない人も中にはある、これは子供の先生尊敬の念をぶち壊すには最もよい方法だ子供が先生を尊敬しなくなるるといふ事を聞かなくなる成績も悪くなり品行も悪くなる子供の面前で先生を侮辱するのは何なる子供の面前で先生を侮辱するのは何のこゝない子供に悪くなれと勧め

先生尊敬について某教育家

は次ぎの様に語つてゐる

或る夏の夕博士の坊ちゃんが一羽の蝶をつまんで来て「お父さまこれは何と言ふ蝶です」と質ねた博士が受取つて見るとその道の専門家である博士も一寸解らぬやうな珍らしいものだった返事に困つてゐると坊ちゃんはお父様が解らなかりや明日學校に行つて先生に聞いて見ると博士の書齋を出て言つて博士の書齋を出て行つた、これを聞いて某博士は困つてしまつた専門家の自分さへも解りかねるものを受持の先生でと解りはじまい、然し子供を傷つけたくない博士はその夜遅くまで書齋で研究をした揚句坊ちゃん

生に手紙を送つた「私の息子が今日蝶を持つて行く私にも物でか兼ねた程珍らしい物だから研究の結果やつと學名その他がわかつたから御知らせ致したい、不肖なりと雖も専門家の私がかかり兼ねた程のものだから失禮ながら専門家でない貴君に或はおわかりではあるまいと思ふから、といつた意味のものであつた

學校から歸つて來た坊ちゃんに再び博士の書齋を訪れて「學校の先生はお父様よと豪いや直ぐ教へて下さつた」と白慢をされた父兄が學校の先生殊に受持の先生に對する子供への尊敬を何處までも助長して行くことゝ立派な例であると思ふ